

漱石が名作「三四郎」で披露した生肉鑑別法

明治の青春を描きながら、明治を超えて「永遠の青春」の息吹を漂わせる夏目漱石の「三四郎」——その「三四郎」には、漱石の文才もさることながら、ユーモアの点でもなかなかのものがあることを思わせる場面が少なくない。

熊本の旧制高等学校を卒業した三四郎が、東京の大学に入学のため上京中の車中で、一見中学の先生風、しかし何とも風変わりな人物と知り合いになる。この男は「正岡子規は果物が好物で、あるときタル柿を十六個も食ったことがある」といった話をしたあとで「どうも好きなものには自然と手が出るものでね。豚などは手が出ないかわりに鼻が出る。豚をね、縛って動けないようにしておいて、その鼻先へ御馳走を並べておくと、動けないものだから鼻の先がだんだん延びてくるそうだ。御馳走に届くまでに延びるそうです」といって三四郎を煙にまぐ。

そして、この男は、途中の停車場で買った水蜜桃を三四郎にもすすめ、話をしているあいだに自分で全部平らげると、タネやら皮やらをひとまとめにして新聞紙にまるめこみ、走っている汽車の窓からポイと窓の外に投げたのである。漱石は、ここで、豚の話では思わず「吹き出した三四郎も「こんどは笑う気が起こらなかつた」と注釈している。



さて、上京した三四郎が、大学の生活にも慣れて、ある夜、学生集会所での懇親会に出席すると、漱石はとっじよとして三四郎について次のような「暴露」を試みるのである。三四郎は、熊本で赤酒ばかり飲んでいた。赤酒というのは、所（地元）のできる下等な酒である。熊本の学生はみんな赤酒をのむ。それが当然と心得ている。たまたま飲食店に上があれば牛肉屋である。その牛肉屋の牛が馬肉ぎゅうかも知れないという嫌疑がある。そこで、学生は皿に盛った肉を手づかみにして、座敷の壁にたたきつける。落ちれば牛肉で、

ひっつけば馬肉だという。まるでまじないみたいなようなことをしていたこの一節は、漱石が旧制第五高等学校の教師をしていたときの体験を転用したものとと思われるが、漱石がはたして学生たちと牛肉屋に上がって体験した話なのかどうか、たぶん「伝聞」くさい。

としても、この一節、つくづくと読むと、当時の地方都市の牛肉屋の座敷がほうふつとしてくるようである。漱石独特の教養調の語り口が巧まぬユーモアを生んでいる。